

学位論文の要約

観光を通じた災害復興の可能性とその形成要因に関する研究

：インドネシア・ムラピ山噴火災害（2010年）を事例に

間中 光

Hikaru Kenchu

四国学院大学社会学部 助教

和歌山大学大学院観光学研究科 博士後期課程 単位取得退学

近年、日本社会及び国際社会にとって重要な課題となっている災害復興では、その優良事例や復興支援に関わるノウハウの蓄積が大きな課題となっている。この課題性は観光にとっても無縁ではなく、2015年4月に発生したネパール地震など、「観光を通じた災害復興」に関する知見が強く求められる事例も多い。このように、日本社会、及び国際社会において災害復興における観光の役割に対する関心が高まっているが、観光学を中心とする既存研究は、観光業の経済的な復旧という点にその主眼を置き、観光による復興貢献については、災害の風化防止や防災教育への活用といった限られた役割を明らかにするに留まってきた。

そこで研究では、観光を通じた災害復興の可能性について明らかにし、その形成要因について考察することを目的として下記の研究を行った。

第Ⅰ部 「観光を通じた災害復興」研究に関する基礎的考察（第1章～3章）

第Ⅰ部では、被災地で行われる観光の現状について2004年のインド洋大津波、2011年の東日本大震災の事例を中心に整理し、災害復興における観光の可能性と課題について考察する。そして、明らかになった可能性と課題を分析する枠組みとして、ダークツーリズム論を中心に既存研究を批判的に検討し、その限界性を指摘する。その上で、「騒乱・擾乱などのショックに対し、システムが同一の機能・構成・フィードバック機能を維持するために変化し、騒乱・擾乱を吸収して再構築するシステムの能力」と定義されるレジリエンス概念を援用した新たな分析枠組みを提示した。

第Ⅱ部 「観光を通じた災害復興」に関する実証分析（第4章～8章）

第Ⅱ部では、被災を起因とした観光展開の分析を通じ、観光を通じた災害復興の可能性と課題を明らかにする。具体的には2010年のインドネシア・ムラピ山噴火災害によって全戸焼失の被害を受けた山村を対象とする。まず、復興過程を時系列的に分類し、各段階における観光事象の展開とその影響について明らかにした上で、被災後の社会変動とその対応において、観光が果たしうる役割とその課題について考察した。結果、観光はボランティアツーリズムによる直接的な生活再建への貢献、及び被災地観光の生み出す収益による経済的

貢献の 2 点について復興に寄与できる可能性を有していること、同時に、生み出された観光収益の限定性という課題が存在することを明らかにし、その上で、観光という営みが、災害復興という名の急激な社会変動の中で地域産業の回復を下支えする特質を有している点を指摘した。そして、それらの考察を通じ、被災地の観光とは、被災後の急激な社会変動の中で、観光の諸相・要素がせめぎあい・交じり合ながら形成される動的なものであること、被災地のダークネスもその形成要素の一つに過ぎず、表出する内容・方法も復興過程の中で変動しえることを示した。

次に、同災害において展開された「代償や埋め合わせを確保する生活戦略」を事例に、こうした生活戦略がいかんして形成されたのかを明らかにする。具体的には、新たに生成された観光事象の収益化を通じその埋め合わせを試みる被災者たちの生活戦略に注目する。そしてこうした生活戦略を可能にした社会的条件の検討を通じ、被災からの回復に寄与する地域社会のレジリエンスについて考察した。結果、ムラピ山噴火災害で被災した地域社会では、被災地の観光に関し、外部からの参入を制限・排除するのではなく、むしろ相互作用の中で創造される新たな機会を、既存の社会構造を活用して自らの関係性の中に取り込んでいくことで観光を通じた災害復興を果たしていたことを明らかにした。

こうした点を踏まえ、ムラピ山噴火災害の復興過程から見出せる地域社会のレジリエンスとは、創発的な状態を生じさせうるほどに外部に開かれており、その恩恵を内部に浸透させうるほどに閉じている社会特質であることを示した。

そして、最後に、本研究の知見が災害研究・観光学・地域研究の各分野に対しいかなる貢献をしようものなのかを述べ、結論とした。

目次

序章 本研究の課題と構成

本研究の背景と意義

本研究の目的と構成

第 I 部 「観光を通じた災害復興」に関する基礎的考察

第 1 章 災害の観光的学的研究

1.1 被災地観光の現在

1.1.1 被災地観光の可能性

1.1.2 被災地観光の課題

1.1.3 小括

1.2 「ダークツーリズム論」の限界

1.2.1 ダークツーリズムの弁陥

1.2.2 ダークツーリズムでは捉えきれない観光

1.2.3 小括

第 2 章 災害研究の視座

- 2.1 災害の社会科学研究
- 2.2 火山噴火災害の特徴
- 第3章 レジリエンス論からの示唆
 - 3.1 レジリエンス概念について
 - 3.2 「観光を通じた災害復興」とレジリエンス
- 第II部 「観光を通じた災害復興」に関する実証分析
 - 第4章 研究対象・手法
 - 4.1 研究対象
 - 4.2 研究対象へのアプローチ
 - 4.3 研究手法
 - 第5章 発災前の社会・文化
 - 5.1 インドネシア社会と災害
 - 5.2 ムラピ山と災害
 - 5.3 ムラピ山と信仰
 - 第6章 被災地観光の可能性と課題
 - 6.1 本章の目的
 - 6.2 研究対象・手法
 - 6.3 研究結果
 - 6.3.1 P集落の復興過程
 - 6.3.2 被災前
 - 6.3.3 避難所期
 - 6.3.4 仮設住宅期
 - 6.3.5 恒久住宅前期
 - 6.3.6 恒久住宅後期
 - 6.4 考察
 - 6.4.1 観光展開とその影響
 - 6.4.2 観光の役割と課題
 - 6.4.3 小括
 - 第7章 被災地観光と地域社会
 - 7.1 本章の目的
 - 7.2 研究対象・手法
 - 7.3 研究結果
 - 7.3.1 ジープツアーの成立経緯
 - 7.3.2 ジープツアーの概要
 - 7.3.3 ジープツアーと運営団体
 - 7.3.4 入域料を徴収する住民組織

7.3.5	観光ポイントの経営主体
7.4	考察
7.5	おわりに
第8章	「被災地の観光」と被災の表象
8.1	本章の目的
8.2	ドーム型集落の誕生
8.3	観光事象の生成と変容
8.4	考察
終章	結論と課題
I	結論
I.1	「観光を通じた災害復興」の可能性と形成要因
I.2	災害研究への貢献
I.3	観光学への貢献
I.4	地域研究への貢献
II	残された課題

参考文献一覧

初出一覧

付録